

清暇錄

大正十年七月中浣起筆

七

特別
14
1919
338



38- 9127

清暇録七

七月廿三日起筆

○前記の如く、此の生誕地に碑を建てつゝ、其の自
己年俵つて居る如く、碑文をありし其志と、其を漢
字を用ひし今も四字の如く書き置るを、是れに
して見れば、たゞは後名をかくるに止るること容易
の事なき、後名の如く、出き方の如く、これを漢字
交うし、たゞは後名をかくるに止るること容易
和名あり、和名もあらず、其の如く、其の如く、
其の時又七、其の如く、其の如く、其の如く、

る。増資の進捗もおぼつかず、未だの文体に決
しき、但し進捗の遅延は、固有名詞を
西洋の漢字を多用せざる、漢字を
用ふることなしと条件を定めしめること
を決定し、先づ角一應文を以て見せしむ
けん、自らの主張するもの、自らも
ぬ。

○早稲田の出版部も、大なる利益を
あつた。此の半年の純益は七八萬圓に
上り、株主とて、十人七人の程に、此の
全部を配当せんとあつた。然るに、目玉つこと
は、且つ大なる租課税の負担がある所、

ら、あつても現在の十萬圓の分を二十萬圓に
増資すべしと、その案を決定し、此秋は、
と内部の協議を起り、即ち利益金を株主の
利益金をとし、欲出し、その金を増資に拂込
き、あつた。五十圓株の半額拂込とする。但し株
主の八分通りと、皆ら役員であり、又幹部の職
任にあるものは、然る旨とす。取
敢て差支るもの、早大と、早大株主の
名義の名義もあつた。早大、寄附するこ
ととし、扱て早大の持株と、増株
の之を併せ、あつた。他の株主は、
入替も、二十萬圓の株式とする。早大、

○名家の簡五十巻計と述べては、又その帳を考へた
 事あり、其の簡と全部を考へた事あり、其の
 志あり、其の事あり、其の帳あり、其の流あり、其の
 帳あり、其の事あり、其の帳あり、其の流あり、其の
 左の如し

大正十年七月廿四日

隆月	勤高益田	竹谷	蘭更依人
董中	潤吉的	谷文一	三夜
梅園	隆吉	桂山	林方生方
蔣塘	大井	親如	三井
石見	甘美洲	五山	枕山
小蔭	延陵	町田	速高
石佛	略高	茶山	普宣

文晁	古葉	三吉	無幻	浮世
懐宮	攝山	陽雲	若呂	寒紫
一宿	道高	下仁田	若呂	雲烟
		印石	若呂	西馬

○此の事、其の事あり、其の帳あり、其の流あり、其の
 帳あり、其の事あり、其の帳あり、其の流あり、其の
 りて、其の事あり、其の帳あり、其の流あり、其の
 ら、其の事あり、其の帳あり、其の流あり、其の
 ら、其の事あり、其の帳あり、其の流あり、其の
 ら、其の事あり、其の帳あり、其の流あり、其の
 ら、其の事あり、其の帳あり、其の流あり、其の

るい不局千葉の英國の貴目がめつる減つてこ
れを信つて七切を目的米國に如く英王の死敵で
あつてもいふ

七月廿五日記

○終の雨に沮るん放翁集を讀むあまを誦を誦
して快氣を叫び杯を呼ぶ

他家釀酒三千石閑愁若解酒不敵今朝
醉眼爛眼電掣驚四顧天地窄忽如揮
掃不自知風雲入懷天借力神龍助
浩氣醒青兕摧山太陰黑此時駐兵胸
中愁槌牀大叫狂脫帽吳淞蜀素不快
人付與方甚至三犬死

放翁の快氣を呼ばしむるし荒し快を

小毎一杯を仰げん老の思ふ故倒せん

○今北碑ハ一と嘯しと前清の生誕記念碑に刻
せんとす文ある初行を考へ来る大伴に於て
可るも、固有名詞即ち傍線を附したる文ある
外しては俗名とするは後世に解さるべき歎
る熟考を要するものあり

今北碑の立つ家一八三五年の月日

生れ出た屋方五郎といふ如鬼が我等の
男爵前島密君にあり浦加及や下田一
外四の船が初めに来た頃十四歳に江
月、出て、昔のあつた西洋の空を飛ぶ

と修めし徳川政府に任へつゝ、いと明治政
府に用ゐらるゝ、其の維新の大事業に伴
ふ制が文物の改善に、此等の貢献をせし
む、郵便も電信も汽船も新あり、其の
際この人の賜ひあり、日夜幾多の起る
べき事、京釜鐵道を完成せしむるも此
人の不具者の以て免る、盲啞学校を
開いたる、その間の精進の爲め、早稲
田の事、此の人の爲め、早稲田の事、
國の此の人も、此の人の爲め、早稲田
遷すことを唱へ出し、此の人の爲め、
早稲田の事、此の人の爲め、早稲田
の事、此の人の爲め、早稲田の事、
減る努力とを一身に備へて、此の人の

ハナハチの長壽を以て、お模の
び、眠るやうに、此の人の爲め、
田湯を人格を以て、此の人の

○不世中、鈴木牧之、其の四世、卯三、中、其の功、
ひ、其の功、其の功、其の功、其の功、
其の功、其の功、其の功、其の功、

夏雪

夏雪とあつたを、其の功、其の功、

ち、又、其の功、其の功、

早蕨

七、八、九の間にやうくのことごとく

女の禮のおとぎと〜と

雪

いふは路を味をあけぬ

まこと〜と雪の境

初秋

まゆゑを尾先うもくまよふは

れとくそよとあふの

〇〇〇〇年込区長と左の通牒列

庶民一〇六七

東京市牛込区東五軒町卅五番地所在(土地家屋)

東京市計畫事業内街路及河川運河に付ての左記

五月十三日内閣認可後有之候家賃不十分の前

記家賃に在事業用土地ノ境域内ニ相あふんは

存ニ就て左記ノ事項爲ト注言希後解お

事此処迄也

進ニ該計畫ノ四面ノ各役所ニ有之候テ

一〇〇〇

記

在事業用土地ノ境域内ニ在る工作物と新築改

築若クハ除去シ又ハ土地ノ形勢を度更せん

ナリ

ハ一九の著述を以て一九のみならず版入すものも
おもしろく存其後牧之版入すものもせばこの
べきまゝ、之れ日と出せしむる者もよしと人
たるを何れなり、此の稿を以て其尾に牧之の
まゝ二三枚と添ふる者れあり、其名を古くう
誰れに勤めたるものなりとせよ、此の他行の
若心も頼みたる文言あり、真逆う一九の心を
東山に作りしことを頼し、七すまじし、おる
べし、此二冊の稿もその稿の真あり、
此の稿の中、美濃紙を五十枚あるもの、
二冊に

七月三十日記

○青木園印講の富山景順の刻する本也余折

日五冊を得て架中に置、日本印史の参考資
料に充つ、此種の印講書を一部を有する人、乃ち是
の敢て其を貪るるを要する人を以て、又内容回し
らるる五冊本一部を得たり、前者と共に益
田香遠の舊稿とに属す、香遠の家、此人の
印目刻の印講を有するものなり、此に此人の
言し、印講荒くあると見え、益田家も此人と
似たりし、似たり、此を得る印講は、前
たる較べん、形較る、少くして東江原麟の
多し、刻し、印教款をぬめ、注候の印
多し、前者と別の為り、之れと青木園印
存と見つ、此刻あり、依傍の印を刻す、

世日本に於ては、^{（元を）} 刊一と云ふ、 曰上記

○宋元本書目行格表上下二卷四冊吳縣江建霞
著す所、書史に要用の也也此出原刊本余未だ見
ず前年文求物治字本を借りしことあるも高の
得ずしとじみぬ此次上海にも多くの石印本を
日本へ輸し来り、中々此の一書あり、則ち購ひ入る
巻首に元祐丁酉劉隆陽の目序あり 曰上記
○波間の錦十二枚の沈士六年得能良女印刷局
在職中、石版を印刷せしもの、當時石版印刷
本邦に始めを行ふ印刷局の特長を用いて此術
を研鑽し大いなる物を極めたり、此の逸話を心へ
し、就して日々寶物と爲し、魚河岸へもて販賣せしむ

と摸写せしめたり、然るに、此の書は、^{（元を）} 奥義あり
且つ変化もあつと云ふを以つて、摸写を終るまで毎
日同一の魚を購ひて机邊に置き、いつと同一の
本職を、その語の所、此の逸話の物なるべし、此
初うと今日の石版や或る之ん及んで、この概
あり、印刷局に、はるる残本を多く愛するものも
願ひを出し、心の裏に下けをなさず、且つこの一
部以上拂下け、^{（元を）} 珍本と有りて、玩ぶべし、此書の
價甚だ貴し、^{（元を）} 印刷物の歴史の標本と有り得べきもの、一也
印刷局の歴史の標本と有り得べきもの、一也
印刷局の歴史の標本と有り得べきもの、一也
印刷局の歴史の標本と有り得べきもの、一也

尾：魚名兼こぶりの解読あり

同上記

印刷の排印：尾の字の振書の和名は朝陽閣字鑑か何れも頭を出さぬハカク下を為さず且つ同の一部分以上を拂下げず、時代後れも甚しと云ふべし

○前にもせし青玉國歌刻金函名漢括演の活字は此の如き也其に複製令に依りして今の傍写と得たり、幅三寸五分六寸五分許の本にて枚数約五十印をぬち、八十紙、表紙裏紙の左の如き一扉あり、扉表二人の戯舞と掲ぐるを云んハ青玉の一人に也

松鶴司馬道人篆録
汪世吳 逸民 篆録

金田名譜

宗郎粉面做象炬手握加馬五之印
蝦節朱顔擬関公腰帶酒尊之章

あゝさるるの老あひ、序文の支那の假名をいふこと交へたる活字也、氣の道人の云ふ人未ださへお、例言に掲ぐる、傍人姓字原俗稱駁雜也、不換鑄之只以煙着中所呼其名

又三都之... 叙

曰有一阿羅漢爛醉如泥尊者者... 尊者北... 呵?大咲曰...

明也... 鋪也... 篆... 馬... 乃楊花... 難舍長兵... 路... 嫂... 之人... 觀他...

庚寅冬十一月

靈吉道人撰

卷首に家柄の印、尾末に清夫の印を収むる優人の
 偽称を掲げしきまを今も移して遺儀あり、刻す
 あり佐々木とある一冊、遊藝の尾名を収むる七巻を
 可とす。又巻末に蓮宗の跋あり、此方蓋の巻を
 の巻に記あり、余の得たる二種の印譜と此に巻
 田氏の巻をうししことあるべし。又云此方一枚錯
 簡あり、又巻首家柄の印を切りぬき別は
 仰山の再書印を貼付す、家柄を辨るに
 ことなる所、辨を以て之を知る、仰山の刻す
 李の巻にありしきまの似たり、要するに改削をぬ
 ぐるものなり

岩崎家に一本を蔵すとあり、他は積善堂にあり

積善堂にんとす時を田家の名を傳りて
 七月廿の記

譜中の人名左の如し

家柄	半丸	芙蓉	睦友
倉柳	滝江	喜友	百司
道楽	一芝	十丁	孤主
杉島	心去	由男	梅幸
田窪	嘉七	四郎	和夕
澄多	雷子	舎丸	魚樂
東山	蓮仙	里虹	鬼童
杉曉	里聲	可慶	素桐

少長	燦老	里環	里挑
魚江	李縵	八甫	春六
舞鶴	舍白	輝長	天幸
三朝	是業	男世川	五嶺
慶子	東朝	困枝	道全
市紅	一鳳	鬼丸	咏之
一二	樽	珉子	路為
晚風	袖歌	萬福	錦石
虎宥	一先	一餘	茶ぬ
由子	帰條	掃子	杜忌
里江	井花	和四	弄花
岩止	艾源	千陽	桐風

一當 古馬
 文由 琴松

潤仙 李咲
 一春 清夫
 素朝 市游

九十人

此等の号、依りあるの傳傳とあるは、此等の尚附にす北名譜の巻首に、此等の號あり

東武 司馬鼻
 浪美 汪標藩
 洛陽 應維驥
 右の芝居「大」洋判「大」入
 を看めよう、くまきり、ことと云ふは



宣言

歐洲大戰を一轉機として人類の歴史に空前の革命起り、爾來日に激烈なる文明の推移を見る、今にして戦前を見る眞に隔世の感あり、此時に方り世界の大勢を窮め變に應じ機に投ずるは國家としても個人としても急務なること論を俟ず、若し此の走馬燈の如き變轉を餘所に見て疎懶一日を過す者あらば、時勢は早く去つて其人必らず一日の敗者たらん、吾文明協會は之れを慨し早く大戰に先だつて、維新改造の元勳大隈侯主宰の下に生る所謂る風雨に先だち門戸を綯繆する者、本會の起る決して偶然にあらざる也、本會は、大戰に際して頼みに双肩に重きを加え平和克復に臨むで更らに又一層責任の重且つ大を覺ふ。

本會は發會の初めより世界の新知識を攝取頒布に力め、譯書を月刊すること茲に十數年今尙ほ昨の如し、而して時勢の益々急なるを感じては、百尺竿頭一步を進め筆陣に加ふるに舌陣を以つてし、社會公衆に各種の講演を力むること又歳あり、皆な革新に對應せんことを庶幾するに外ならざるなり、若し夫れ東西の文明を調和し本邦の嚮ふ所を窮めんとする一事は、主宰の侯自ら身を挺して其衝に當り、多くの識者を會して月次研鑽を累ぬる已に二十數回、何時も侯の自邸を其會場に充て會衆堂に溢るを常とす、侯は起身の初めより我が文明を指導し來つて今齒入秩に及んで益々盛んなり、而して其の指導機關は實に本會となす、本會は文明の食餌を間斷なく供給するものなり、而して其の澤に浴する者今全國に充ち識者は認めて斯界の權威となす。寄語す。此の激烈なる過渡期に立ち世界の事態に通せざらんは自ら選んで癡人となるの危険あり、苟くも向上の意氣ある人士は本會に來り投ずるを躊躇する莫れ、茲に本會の趣旨を宣す。

大正十年八月

大日本文明協會

八日(六月)戴星而出平沙许里。踰梁岡。欲无绝。绝田中至中村。弥逢一川流。十有八涉。大澤至葡萄山道也。歟。登降。北。驱。无蚊。

九日。鷄鸣。又登降。长坂。抵村上。市。廓。稍。整。城。隍。见山上。崇。壙。言。之。土人多以茶为业。所。遇。茶。塢。过。半。抵。塩。谷。有。渡。置。閘。法。印。渡。者。之。掌。渡。幸。揆。掌。始。渡。亦。一。奇。路。皆。溯。海。沙。碛。热。甚。西。子。为。道。于。松。林。虽。免。热。沙。之。苦。而。林。村。茂。密。不。得。微。凉。亦。复。窮。而。采。也。

十日。踏。路。之。所。辞。血。如。真。野。買。舟。次。新潟。之。为。便。辰。初。抵。真。野。乘。船。下。嘉。沈。川。久。旱。水。落。歟。楫。沙。舟。子。为。夜。飯。後。七。奇。事。世。之。所。借。知。也。次。

雖言其風。段也。大人不欲見之。日。映。次。新。潟。北。地。之。要。津。而。一。聚。之。雄。也。滿。買。之。利。其。酒。田。仰。仲。是。片。第。之。鄉。也。擬。叩。亭。主人。得。翁。之。瓜。萬。而。相。見。主。云。吾。能。亂。片。先生。而。不。識。其。他。夜。抵。舟。子。喜。至。小。酌。夜。市。

十一日。辨。色。而。出。路。又。沙。碛。舍。後。程。乙。村。人。一。行。三。人。之。京。道。路。之。間。話。淡。漸。熟。遂。情。好。相。投。統。为。日。行。飯。于。赤。塚。徑。極。崎。投。旅。房。二。馭。俱。山。却。

十二日。有。峻。坂。待。經。泊。飯。于。云。雲。崎。亦。一。聚。也。其。休。渡。數。凡。羽。羽。皆。溯。海。而。港。澳。之。宜。繫。巨。艦。者。羽。而。酒。田。秋。田。越。則。新。潟。云。雲。崎。柏。崎。教。處。身。而。柏。崎。器。月。里。許。

十三日越羅波山道也。冷與葡萄等，鉢時掃路二畝沙尤深，凡嶮海為狀，人貪步潮汐淘沙處，以沙濕不熱且足趾不沒也。獨鉢時掃路二畝，地勢不得步其沙嘴沙積毒熱如爐炭燔灼，困亦甚矣。此間二三里，通呼村濱村夫馬隸，皆以履為鞋，是防熱沙沒踵之苦也。履製與無齒，為鞋繫，晚投里井，沙積尽于此，眉皺如慰，炎蒸之間，得一詩發笑，炎熱沙深二三尺，無林樾取微涼，縱吾鐵脚或鏖却行在治人火炭坊。蓋實驗也。古人黃牛詩云：三朝又三暮，不覺於房成。蓋嘆咤其艱也。古人富北越路，不知定為剡朝暮乎。十四日任春日，新田到高田，柳原次都為午道，三石刻字云：北走加賀之路，直行出野，經教村通。

聞子視大人甚悅之，及路殊踈，大坂曰大田切，小坂曰小田坂，投関川，六山驛。

我以視嶽為志久矣，嘗將囊糶者數，而世故趨趨顧莫之遘，力憾劫力窮，吞志而往，悲夫。今茲余始奮栗策，友用六德忠而贊成，西使第三未松，回御迎翁節，即至實四月廿日也。余就膝下，請濟勝一事，家忌大喜，且曰：我懷志一甲子，猶一日，今歸其毛鱗，其嶽雪藜，奇未為晚，世寬勉旃。與于卜日，以上途，諸友皆未贊，趙為及子岳，寄六躬，東奧之勝，故特從吏焉。片為及鳴門子琴，詩以壯其行，赤山云：乘共招飲，餞之，士德同舟送之平安，皆極官躬送，以廿月二日起程。

の字之れに備ふるものあり。大体に於て後を得る
もの優る所あり。唯に一淵淵と文字の全く磨
滅し、その前者より磨滅の終其態を存せし若干
の文字ありしことを表すものあり。後ある装潢の
際之れを省きたり。文字を翻しと果て幾字ありしと
その痕跡も文章を味ふに大切也。仍て重複を辭
せず二本共に架中と存せし。彼是巻勘と便する
ことあり。

附記す。篆額「魯孔子廟之碑」六字未
何人の筆と云ふを考くず。余名致隆を於
ては、又し其筆と云ふを得ん。文字頗る奇古
し。其高稚人万の書物と云ふを其に

惟物也

○大江廣海全書あり。其の本文のなるとは、其の細に和
語を以てる者あり。余有人五卷の家と云ふ海の
おし行出帳と見終に、刻書を得。頃者、改註を
し、或る五卷中に、巻尾に、此見しことを云ふ。其の
の後、其の云々

大江廣海あり。其の書、富平家授出。法於常祖文
文仲君故。其家多為其蹟。此帳即其一也。其
海、其年、徒京部、以和記、其多、其神、其花
價、其于一、其里、其蹟、其多、其世、其而、其其、其の、其
家、其外、其多、其所、其見、其且、其比、其帳、其法、其萬、其鳥、其石、其道、其勤、其古

て凡に、三寸四分角の字とすも三十四字流十一行心
三寸七十四字流十三行心(大休あり)はむある、二寸四
分の字とすも五十七字流十八行心二十六字あり
る、けんごせんにあつた、行結を極め大
る、美の女を採りまゝ上あつた、致向がある

の、あ、言、前、河、内、也、造、ら、ぬ、ひ、ま、来、れ、時、は、計
誤、天、し、語、の、う、ま、い、に、巨、本、を、信、え、う、を、無、形、し
て、亦、以、満、世、既、其、を、と、ら、け、た、し、以、校、ひ、あ、つ、た、女
節、京、山、と、牧、之、の、う、入、流、し、及、ん、で、東、山、の、所、に、以、馬
琴、の、う、ま、う、ま、の、中、に、馬、琴、う、ま、依、り、所、志、と、す
と、問、は、ん、て、部、向、う、後、後、家、何、ん、の、其、内、の、一、と、差、
へ、と、ま、ふ、こ、と、を、流、す、と、あ、是、也、の、と、あ、つ、と、あ、り、的、哉

心、を、す、ま、う、と、昔、余、こ、入、り、た、ま、ぬ、は、ら、ま、ぬ、部、向、の、志
新、と、う、ま、人、か、ま、ん、ま、あ、ら、う、ま、あ、ら、う、後、後、家、と
志、し、と、ま、う、ま、糊、の、の、と、ま、い、あ、ら、う、南、時、を、就、心、を
て、糊、の、の、是、東、う、う、ら、は、流、ひ、京、傳、文、の、名、存、料、を、得
れ、と、云、の、う、時、ひ、馬、琴、の、初、身、の、流、ひ、ま、ま、ふ、部、心、を
ひ、い、か、ん、ぬ、と、あ、く、と、斯、の、志、就、を、抱、い、れ、た、の、と、あ、ら
う、造、の、後、も、流、う、井、後、と、ま、と、ま、一、の、校、に、思、う、一、九
う、後、後、の、下、つ、に、流、う、信、誠、の、流、う、秋、山、の、流、行、し
れ、此、行、也、亦、れ、道、造、の、流、う、一、九、の、流、を、ひ、あ、ら、う
と、ま、あ、ら、ま、此、の、秋、山、の、後、後、に、居、て、の、う、別、と
前、院、郡、の、校、瑞、心、あ、ら、北、流、也、也、邊、版、と、も、流、
味、あ、り、と、ま、う、ん、物、新、言、の、の、ま、の、を、流、流、を、流、う

版元として西洋文人の逸話る數十を蒐めたりその春
未折角現代文をむき出しぬの増補七して
どう何と云々氣味乗るも其儘おすとおきし
て出版部より送られて此程まで十件かうり
増補し、飯田俊雄といふ文章手ある校友を校
を托すると共に排刊の暇も亦を一切托し畢ん
ぬ日あや印刷こころは秋季に考ふる事あり
ぬば幸也

自今おれも編んておき致ししものあり
新出陽の逸話等に關するものあり、彼
是れ集めたりは或る冊をあらまじし、此の
自分のものとしてあるもの多し、世方に流布

し居る程々の版を又無きものあり、今も自家
の穿鑿を、係りものあり、早大出版部の
ホセリース(即ち艦の泡と同じセリース)中
に於ても差支るべき、扱ふ所あり、日本文人の逸
話をあらまじし、文藝一夕流七同じセリース
の向く加へて出版する、然るも、山陽の人々の
みづかきと別し、一冊とすべし
か量あり

曰上記

○出版部増資の事と本巻の首端にガウト
初め、之れなき、前梓部の後、あつるを
開き、程々、討獲の案、大体を前記のことと
する、十萬圓増資と二十萬とすること

後亦繼之泰山之韻矣、後思凡有、余大以愛
有、今四五七掃掃、定字定、之、御七、湯、大正十三年
八月、京都、修家、修

山村喜

二月、東、入、秋、衣、四、郊、晴、也、雨、湯、春、程、兒、童、放、鷓
總、離、也、忽、向、天、邊、跋、尾、飛

塔火

多、面、千、群、沒、影、漁、之、色、陰、一、點、暮、約、念、情、他、為、照
河、梁、別、在、伴、之、難、御、飛、向、南 及典何家得未

初夏新晴

蛙、終、帶、春、水、盈、田、槐、葉、成、陰、樹、引、烟、新、雨、無、寒
復、無、暑、若、可、人、風、夏、初、天 不愧古人

旅情

故、不、過、一、天、一、淮、有、誰、打、後、流、襟、期、始、知、為、客、難、信
京、果、在、福、家、未、久、時 在人未道破者十四字亦足千古

江郎夜魚

江、頭、月、未、升、漏、岸、夜、烟、凝、軋、少、柔、梅、掃、漁、一、點
快

去四大夫相顧

身、懷、空、物、勢、全、忘、凡、彩、接、人、情、亦、苦、勸、酒、愁、無、盤
味、好、繫、軟、幸、有、柳、條、長 亦奉山家法

蚌蛤石吟為空室玄甫

奉、石、化、為、粟、斜、安、麻、子、抄、人、歎、是、新、石、可、奉、唐、錦
背、供、金、玩、口、吐、接、之、知、不、恥 寄托感慨非淺也然不言

宿山寺

佛殿峰深倚翠屏，微烟岚气四窗生。
窗中静夜下万生月，袖里清风入九天。

昔友人在京河

古榻歌为善逢迎，月窟金波展共倾。
醉折一枝香露，烛暗不知何事凤凰城。

雨泊

渺烟淡、浦雪淡、雨改归舟。
故人恨重江头，甚殿如何寺寺，总是蓬窗夜镜。

汤原雅吟

浴後乘凉步小洲，鐘鸣古寺夕阳收。
温汤入涧，烟在一缕凉、傍岸流。

城信曲 词整

风劲沙沉，雁正飞，草枯原上兔方肥。
人共骑，霜未挑，战闲去，辕门打猎归。

春雨

巷泥难污杏花村，细雨黄昏坐小轩。
怕被风吹，沾湿甚一、愁、鸟、入、柳、条、愁。

晚晴

夕阳沈处，野渡口，客多信。
昏木鸟将宿，浅滩鱼乱泳。

哀夜步韵

枕上孤灯照夜闲，杜鹃啼泪微。
峡云同色，只初人归去，不许长眠梦故乡。

浪華海邊負島の子彦船

不測何也駐桂棧北者南南湧望爾寒中佳慕惟御友
着去尋君弟式橋

西馬

絶唱 一可知南不測島内北不尋新地
論人是如論詩是如詩

覬切齒何知非逸姿十年惠養脱銜霸四言一玄是與用
汗血酬恩或有時 温厚中具骨力卓平可存

〇別名を刊し紅丸号船中を名を著るありの漢書
の譯し此破天象とそあ少説を後んか又此天体の後
を記すもあはれん天文家の理を屋づくめの家は
奥のあはれあはれしく感しれりも夜這星のころん
ころん Eras エロスとそふのそふらついである、今休此也

星と太陽の軌道は内轉するお星もあるのたの
他の星と事つてころんが深氣の時く軌道を曉ん
地球の近えんとする、そこは日本も夜這星を
云ふに因るに因るに附らるる、西洋の七文
字の日はたぬ性熱を因める後か沖んかぬるも
おろし性熱をエロテツクらるる、まといし
ころんエロスとそふのそふである、お新り一はす
織の四折しは時を打たさる、のふすとそふの
母西洋の誘ひある北波太平洋合戦と
合し米島の紙の紙の主張とて揚げ
ル、電報のゆゑ此後引用してある

ニ敬^レしと授^レ子^ニとて又^レも、まことこの物^レあり
しもあるの^レまこと胸^中自^問自^答を深^更まむ
マンジリともおれ梅^じ焼^あてあると、忽^然とて
隣^室よりおれうらあのと伺^つてもうらう^う瑞^座
いまうらうと云^へう、一^儀りぬいすお出^下さい
と答^へて、この雪^雨を起^した、さう此^婦人を
何^物きくの男^ハ問^ふんとし、^此婦^人逸^早く婦^人
うらうらう私^シの名^を問^ふて下^さるる、私^シは
りもあふれのお^れ前^を伺^ひまもんまれば
うらう同じ^に汽車^で東京^へ帰^る途中^中七[、]東京^駅
へ着^しても私^シは挨拶^をして下^さるる、^因
くおれうら、と云^へ共^ニ帰^途に此^婦人^を東京^駅

こ着^した、男^と婦^人の物^もあふることな素
知^るぬ振^りに、駅^に入^つた、あう、何^物かある
ふ、先^角角^角のまうらう、此^婦人^の目^状と着
し、うらうの行^動其^他に注^意をせしめ、二人^の立
汎^のあるまうらう、迎^へて来^てあり、奥^極目^目く
と敬^意をせりて、うらうの漸^や々^と其^の素^性の
地位^{ある}ものもある、こも判^しその、其^後うら
まを姓^をもうらうて此^婦人^へ出^合ひぬ、
こん子^話しとあ、^此婦^人珍^らしくも、その
互^ひに姓^名を名^乗り、今^の、殊^に婦^人うらう、
ことを提^案し、^所氣^校、^あ、
○湯^淺は、^月、^果、^因、^う、^味、^こ、^来、^て、^余、^を、^以

像ハ不考なりと二分して震災に罹り終に四祿の
尖を受く誠と惜ありし。四祿を免るゑんが例の
田家安原の刻字ある大鐘を修りて之を
カ此もら如りて之を意の：強き音をせむる
此鐘の金味●大佛焚焼の断片の金味と
似たり流石に概山時代の物を押書して之を
とうるるけり、八坂塔カ此が志みく見たりと
千年以前の建造物なり、家苑に此の塔の材
を以て心りたる研匣あり、是し修理の時腐
蝕の材の故を以て取外したる材を利用し
心りたるもの也、此の研匣を珍とするもの此塔を
掃部親らざる可らば、清水寺例に依り例のこと

くするもの此其正面より登眺するの険を廻り一
捷を以りたる登るるものと便るるものと掘原を扱
し其年を記するもの、例の忠僕茶屋に
懸りて彼の瓦垣る他在いと問くハ一ある前
段しつとこそ、垣の字をいりこしつものこと
之れを見んハ大隈侯椅子ノ解こんある下
立ちの例の垣也、これと前年、余も侯も
行くと東山を跋渉せし時の字をいりこしつもの
椅子に乗りしもの侯のハ菊池大井兼(その以京
柳方子伝書)と余りも、京都の紳士を五中
柳元(そのフロウグリート)と記す、今此の
字を見ると、侯の後ろよハナマ帽を冠り

此の十のりとその日のと、東神の俗傳の火の字山、
 大宮の火を焚くの日、恰う七日大丸
 先駈をとり、その奇なる、因縁もそのべき、



鯨波福浦の猖々穴

(鹽澤町鈴木湖影寫)

郷國の
 涼味一
 挿こ
 又ねむ
 の外お
 の具と
 為す

しんがいの
ていご

こころはあが郵便じけいの大おんじんかぶこ
ゑをあげたうせきである。明治はめあでは
このへんから東京一通信するに四五年か
かりものにもうそはふをいかなうにひかず
もひようせしめてある。それとてあつし
かあせし大小のにもつもきんともあつし
いけんのおちでしんそにあらうこと
は、そのはこう人である。汽船のあつちが
せうがけいここの交通をいんにしおれで
くばらせるつがよさうさいしめの新築のひ

とう郵便船をいこし郵便船法をいせしめま
た日英トけんまつに韓日に船をいせしめ
この人である。つまり船を電信法みなこの
人におよとこうかおほい。ちうじつでやつし
んでそのめいであらんでしゆみもひろあつ
た。東京還るまつきまはとそく漢字のはい
しそも純新まつにけんきしそである。早稲田大
学やその理学校らもいんし海軍提督を
あつちする。天保の年にくまれ大のり年にな
くならぬ。とーりすか。

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

十二

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

十二

以下全て
白紙

